みめぐみの

第42部

御遠忌・落慶特集号

みめぐみの

第42部

大谷光道著

目次

落慶、御遠忌、これから……2
落慶本番……6
御遠忌……10
型は二つ……13
まだまだ……15
坂東曲……17
そろいの装束……19
そして……21
表白……22
得度して二年……27
須弥壇収骨のお知らせ……33
あとがき……35

落慶、御遠忌、これから

この嵯峨の地に移って五年半、この度ようやく寺の中核である本堂の落慶法要を迎えることができ、続いて宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要も滞りなく終えることができました。読者の皆様には、今日まで物心両面にわたるお力添えをいただき、ここに改めて御礼申し上げます。

建立趣旨――『表白（ひょうびゃく）』（本文・意訳は末尾参照）

想い起こせば、いわゆる「お東紛争」が始まったのが昭和四十四年四月の開申ですから、そのとき前住上人は満六十五歳でした。その後、平成五年四

表　白

月、八十九歳で御遷化になるまで、まる二十四年間、紛争は次第に激化していきました。宗祖親鸞聖人の教えに反して「往生は現世でするもの」と主張する人たちが出てきて、この由々しき問題に前住上人があらゆる手を尽くしてその是正に努められたというのが、この紛争の核心なのですが、この二十四年間をざっと眺めるとき、私たちのほうははっきり言って、全体としては次第に劣勢に流れていきました。長期間をかけて次第に劣勢に赴くときに受ける精神的過酷さは、遠い将来に再起

のチャンスを夢見ることが許される若い者のそれとは、比べものにならないものと思います。

昭和五十三年十一月に決行された本願寺の独立（真宗大谷派という団体の支配から本願寺を切り離す手続き）も失敗に終わり、さらに晩年に至って、「正しい教えを正しく伝えていくためには、東西本願寺分派以来四百年、代々住み慣れた下京烏丸七条の地から離れて別に新本願寺を建立するしかない」と決意し、さらにそれを実現できない思いを残しての御遷化でした。表白（後述）で言う「先師終身の素願」には、これだけの前住上人の強い思いが入っているのです。

これがそのまま私の宿題となりました。それは同時に、前住上人と志を共にしてきた人たちの宿題でした。

新本願寺としてまことにぴったりの現在の土地を見つけたのは、平成十五

年春のことですが、その一年後、この土地の購入を終えるまでのいくつものドラマが、表白を読み上げながらも走馬燈のように甦っていました（概略は平成十七年七月『御遷座特集』参照）。まるで、その場所に光明が差し、その光明に導かれるまま購入を決め、お金の段取りから、国有地であったための入札から、登記に至るまでのすべての段階にわたって、目に見えない大きな力の後押しを感じていました。つまり「自分で見つけた」のでもなければ「自分の努力で購入したものでもない」のです。まさに「仏智の光明に従り右京嵯峨の霊地へ導きを蒙り」（『表白』参照）としか言いようがなく、当然のこととしてここに御本尊、御真影（ごしんねい）はじめ諸尊にお遷（うつ）りを願ったのでした。平成十七年秋のことです。

それから三年半で、本堂の着工に漕ぎ着けました。ここは風致地区であるため、本堂にしかるべき床面積が取れず、ついに地下とする案が浮上するま

でにも、いくつかの設計上の試みが重ねられました。

いよいよ設計ができると、次は予算の問題です。何事も世の中は「先立つもの」がないと、物事は成就しません。当然ながら「お金は集まるだろうか」は、役員たちの心配事でした。ところが実際に工事を始めてみると、ありがたいことに支払いが滞ることは一度もありませんでした。

多くの方々の熱い思いがご懇志という形になって現れたのは言うまでもありませんが、私がお金を集めるために何の努力もしなかったのに、です。それで、工事の途中くらいから「仏様は、ご自分のおいでになるところはご自分でお造りになるのだ」と感じるようになり、次第にこの思いは確信となりました。まことに申し訳ないことですが、この愚僧——私——としては、「有り難い」と申すほかありません。

落慶本番

五月十六日は、早朝よりお稚児さんのお化粧、衣装替えをはじめ、各部署の準備作業、着替え等で寺の中じゅう活気に満ちていました。

寺務所二階の仮御堂では、まず、大法要の前には必ず行う御真影（宗祖親鸞聖人御木像）のお念珠の房のお取り替えが家内（裏方）と婿（新裏方）によって行われ、十一時からは御遷座の勤行となり、寺務所二階書院も仮御堂の役を終えました。

お房のお取り替え

その後、御本尊（阿弥陀如来立像）を専用のお舟（格子状のお輿）に、御真影を専用の御厨子にお移しして、新本堂へのお練りとなります。行

お舟とお輿

列は一旦山門予定地から境内を出て、道路を通って南通用門を入り、本堂一階の茶所（仮称）を経て、地階の本堂へと続きます。御本尊、御真影、太子・七高僧御絵像、九字・十字御名号、歴代御影、天牌（てんぱい）を御安置の後、いよいよ午後の落慶法要となりました。

真宗各派の御法主・御門主方（木辺派の木邊圓慈門主、山元派の藤原光教法主、高田派宗務総長（法主代理））と、青蓮院の東伏見慈晃門主はじめ天台、真言、臨済、曹洞各宗の高僧方も御参詣・御焼香いただき、行道散華（ぎょうどうさんげ）を

お練り

中心としたお祝いの勤行を行いました。行道散華とは、阿弥陀経（漢音）を唱えながら須弥壇の周りを回り散華する（花びらをまく）ことで、極楽世界で一日六回曼陀羅の花が降ることに因んで、盛大なお祝いの法要には必ず行う儀式です。

行道散華に先立ち、私が登高座（中央の礼盤に登壇する）して、表白を読み上げました。表白というのは、法要の趣旨を仏前で、あらゆる対象――御本尊、御真影はじめ七高僧、歴代、参詣の僧侶、ご門徒、そして世の中じゅ

う――に向かって告げる、厳粛な儀式です。

登高座の後、宗祖御真影正面の自分の席に戻り、勤行の続きを終え、無事にこの日の法要がすみました。

来賓の高僧方にお礼のご挨拶、参詣の方々にご挨拶をすませ、この本堂落慶法要という新本願寺にとって大きな区切りの一日も幕となりました

来賓の御参詣

御遠忌

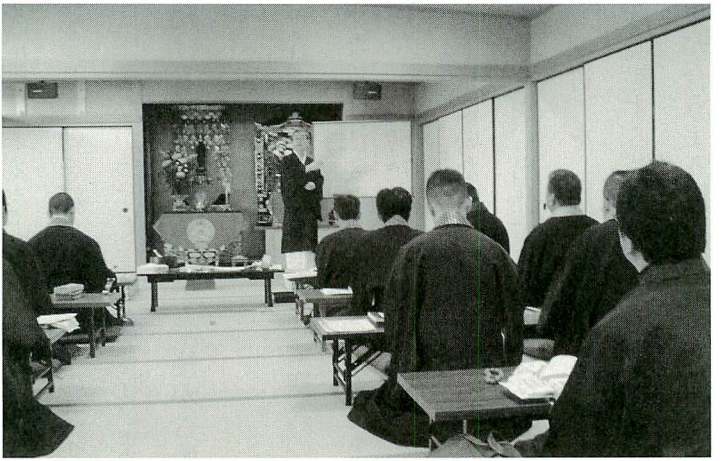
十七日の逮夜からは、二十日の日中まで三昼夜の御遠忌が始まりました。

ここで、「四日間にわたる三昼夜」というのがわかりにくいので、説明しておきます。午後（二～三時頃）の勤行を逮夜、早朝（六～八時頃）の勤行

を晨朝（おあさじ）、昼前（十～十一時頃）の勤行を日中と言い、逮夜から始まり晨朝を経て日中までのサイクルを一昼夜と数えます。したがって、四日にまたがっても三昼夜と呼びます。このほか、五昼夜、七昼夜など何日も続ける法要でも、必ず午後から始まり午前中に終わるように日程を組みます。

五十年に一度の宗祖親鸞聖人の御遠忌法要は、本願寺としてはもっとも厳粛な重い法要で、せっかく本堂もできたのですから、伝統通りすべてをこなす必要があります。

下京にいた頃は、大谷家のお内仏（仏間）で本願寺の年中行事を行っていましたが、出仕する僧侶には必ず法要の三十分前に集合してもらって、習礼（練習）をし、声明（勤行、お勤め）の中で間違いやすいところを中心に注意喚起することにしていました。その積み重ねがあって、ある程度は皆の意気が合うようになっていたのですが、なにぶん三十分ではとても「習礼」と



御習礼

また以前から、定期的に声明研修を行ってきたので、ある程度のことはこなせる人が集まってくれるとはいうものの、ふだんから慣れている声明ではなく、今回は落慶法要も御遠忌法要も特に難易度が高く、十二淘（ゆり）、句淘（くゆり）、位上曲（じょうきょく）（後述）といった声明が必要なので、約四十人が二日ずつ合宿して五回、計十日間の習礼を行うことにしました。

そもそも、坂東曲（ばんどうぶし）も含めて十二淘、句淘、位上曲という声明は、昔から本願寺だけでしか行わないもっとも高度な勤行です。わざわざ遠方より上山し

た御門徒が、ふだん聞くことのできないお勤めに逢い「ここまで来て良かった」と、今日まで感涙にむせんで来られたのです。

型は二つ

以前、東大寺（華厳宗）で修二会（しゅにえ）（お水取り）にお参りさせていただき、声明を聞いて、そのすばらしさに、「聞かせる声明」「聞くだけで感動する声明」について、深く感じさせられました。

これを仮に「コンサート型」と呼ぶなら、もう一方で「皆で一緒に唱える声明」という「参加型」の声明もあります。いずれも意味のある型ではありますが、それぞれ一長一短です。

コンサート型は、上手であれば聞いてすばらしいけれども、難易度が高く、とても「皆で一緒に……」は無理で、練習を重ねないと聞くに堪えないものとなります。一方、参加型は難易度が低く覚えやすいけれども、聞いて感動

するためのものではなく、皆で一緒に唱えることに感動があると言えましょう。

他宗派の声明について精通しているわけではない私が、軽々に物は言えませんが、華厳宗や真言宗はコンサート型、日蓮宗やお西（西本願寺）は参加型であろうと感じています。そして、私どもの東（東本願寺）、特に今回のように難易度の高い声明は、コンサート型であると言えます。

いつも、この両者の区別を明確に意識しておくことが肝要です。このどちらにするのか、自分たちの声明はどちらなのか、曖昧なまま中途半端な考え方で法要を計画すると、参詣の方々に欲求不満を与えるという実例をいくつも見てきました。

さきに触れた、十二淘、句淘、位上曲について、そのすべてを説明するには紙面が許さないので、たとえば、十二淘について簡単に述べておきましょう。

念仏・和讃は正信偈と共に、東では寺院でも家庭でもいつも勤めます。念

仏・和讃には節が七通り（七段階）あり、大まかに言うと、「淘（ゆり）」と呼ばれる細かい節の入るところが所々にあり、その淘の数に七通りがあって、二淘（ふたつ）、三淘（みつ）、五三（ごさん）、五淘（いつつ）、八淘（やつ）、十淘（と）、十二淘（じゅうに）と呼ばれます。たとえば、御門徒のお宅で毎朝唱えられているのは、ふつう三淘です。三淘、五淘くらいは参加型が可能ですが、十淘、十二淘くらいになると、たんに淘の数が増えるだけに止まらないので難易度は高く、しかし練習さえしっかりすれば「聞かせる声明」、請け合いです。

まだまだ

さきに、御門徒がふだん聞くことのできないお勤めに逢いに上山されて……と言いました。もちろん、報恩講等に上山されるのは「本願寺（本山）の声明を聞きに」だけではなく、御真影を拝みに、その雰囲気に触れに、等々です。しかし少なくとも、せっかく上山して来て、毎朝家で上げているお勤

めと一緒では、「京都に出てきた意味がない」とがっかりされるのではないでしょうか。このような期待に応えるためにも、十淘、十二淘は必須です。ただし、当然のことながら、ただ漫然と十淘、十二淘をやるだけでは駄目で、「それだけのもの」にしないと、せっかく上山された方々に申し訳ありません。

ただ、ありがたいことに、御門徒の多くは、聞くに堪えない声明でも文句を仰いません。「そんなもの」と思っておられるのか、「言ってはいけない」と遠慮されているのか。少なくとも、「聞かせるもの」「聞いて感動するもの」があるとまでは、期待されていないのは確かです。

今回の習礼でかなりのレベルまでは、皆のリズムと音程を揃えることができました。でもまだまだです。今後、さらに磨きをかけて、味付けもして、皆さんのお耳に達するようにいたしましょう。

御門徒と共に坂東曲

坂東曲

ここまで述べてきた声のみの声明と違って、本願寺には坂東曲という変わった声明があります。これも古来本願寺（本山）だけで、しかも専門の人たちが勤めてきた声明です。どこが変わっているかというと、上半身を前後左右に激しく揺すって勤める、まことに迫力ある声明です。

その由来は、「親鸞聖人が流罪に遭われ越後へ赴かれるときに船の上で皆で称えた念仏である」とか、また「聖

人がお亡くなりになったときに京都まで駆けつけた関東（つまり、坂東）のお弟子方が号泣した涙の念仏である」という説もあります。

さきに私は、声明を二つの型に分類しましたが、坂東曲はそのいずれにも入れにくい声明です。これは「聞く」よりも「見る」声明で、私はこれを参加型にしたいと以前から思っていました。御門徒にも加わっていただくのです。

今回は、御遠忌の最終日、二十日の結願日中に坂東曲を新門の調声（ちょうしょう）（リーダー）のもとで行いました。まだまだ少人数でした

が、それでも御門徒二十人以上が参加してくださいました。私が皆さんに奨励し、地方に出向いてもお稽古しましたが、後でビデオを見せてもらって、皆さん相当上達されているのに驚き、たいへん頼もしく思いました。

まるで稲の穂が風になびくときのように、御堂中の人々が前後左右に揺れて坂東曲を唱える光景を見るのが、以前からの私の夢です。皆さん、是非この夢を共有してください。

そろいの装束

たまにですが、他宗派の勤行にお参りすることがあり、いつも感じることがあります。僧侶の装束の色が揃っていることです。これに比べて私どものところでは多種多様の色があり、あるいはこれを百花繚乱と見る人もあるかも知れません。しかし、勤行というのは僧侶が思い思いの衣を着て自己主張する場ではなく、心をつにして仏様に向かって声明を唱え、御恩報謝の心を

表すもので、それを後ろからお参りしている人々に聞いてもらうものでしょう。

この原点を表現するため、また、本堂落慶・御遠忌というスタートにあたって、そろいの衣を新調し、全員に着てもらいました。嵯峨の竹林をイメージしたこの裳附（もつけ）（衣）の色は、若竹（わかたけ）

そろいの装束

襲（がさね）と名付けました。

またお袈裟（五条袈裟）は、昭和五十三年、本願寺の独立宣言に呼応して独立した寺院の住職に前住上人から贈られた、薄黄色地に赤い紋の「独立記念五条」を全員に着てもらいました。この通称「独立五条」は本願寺独立の

象徴で、若竹襲と相俟(あいま)って、そのまま新本願寺の歴史を語る風景となりました。

そして……

「正しい教えを正しく伝える」というのは、ごく当たり前のことです。しかしこれがまことに困難な作業であることは、前住上人のご生涯が物語っています。考えてみれば、これは前住上人お独りに止まらず、宗祖親鸞聖人はじめ歴代のお仕事でもありました。

今後とも「正しい浄土真宗を正しく伝えていく」ことを中心に据えながら、新しい本堂を大いに活用して、本願寺がもっと広く親しんでいただける寺となれるよう、ご一緒にあらゆる企画を試してまいりましょう。

表白

思いめぐらしてみるに、弥陀の本願力によって衆生が浄土に往生し、またこの世に還って来て教えを説くという浄土真宗の教えは、この世界に広まり、阿弥陀様は極楽浄土から私たちを呼び、お釈迦様はこの世界から浄土に行くことを勧められるという浄土真宗の教えは、末法のこの世にまさに相応しく、仏法と世俗の法をバランス良く保つという浄土真宗の教えは、煩悩にまみれた凡夫に光を与え、慈悲を加え智慧を与えてくださる仏様の御利益は、凡夫の欠けているところを助け補ってくださる。

表白

窃かに以んみれば

往還ニ廻向の法　此界に弘通し

ニ尊喚遣の教義　気運に相応す

真俗ニ諦の教道　能く無明を破し

悲智双行の利益　現代を裨補す

是を以て

無碍の慧日　高く日域を照らし

難思の願船　普く四海を済ふ

然れば我本廟　昭和己來

宗祖之法義に違し

現生往生に固執するの輩湿生す

これをもって、遮られることのない智慧の光は、広く日本中を照らし、思い計ることの及ばない本願力の船は、普く四方の海に沈んでいる凡夫をすくうようである。

さて、我が本願寺は、昭和の時代から、宗祖聖人の教えに違って、「この世で（生あるうちに）往生する」との考え方に固執する人たちが、どこからともなく生まれ集まってきたのである。それはまるで、湿った所から自然に発生する蚊などの虫のようであった。

そうでありながら、先師・蘭如上人は、これを止めることが出来ず、心配が絶えなかった。

よって、烏丸七条の旧地を離れ、教えの根本となる寺を別の所に建てようとされた。

然りと雖ども
先師上人　此を止む能はず
憂慮窮まり無し
仍て即ち
烏丸七条の旧地を離れ
本寺を別所に建てんと欲す
悲しき哉
先師上人
平成五年四月十三日
志半ばにして遷化したまふ
遺書に曰く
独り光道余の後継者と為さ使む
将来必ずや勝法宣布する事大なりと
信ずと

悲しいことである。先師上人は、平成五年四月十三日、志半ばにして御遷化になった。

遺書に仰っている。「光道のみを私の後継者とならせる。将来必ずすぐれた教え（浄土真宗）を大いに宣布することと信じる」と。

それゆえ、先師上人の思し召しによって、法主の職を光道に譲られることになった。

光道、才能のないのをおしはからずに、分不相応にも重任を荷うのは、心の底から恥ずかしいことだけれども、厳しい命に対して、また、逃げる所もない。

よって、うやうやしく慈しみ深い教訓を押し戴き、新たに法統を継ぐ。

今回の造営は、まさに先師が終身、常日頃抱

然者

先師を尋ぬるに遷化せられ
職を光道に譲らる
光道
菲才を揣ず　叨に重任を荷ふは
衷心深く自愧すと雖も
厳命復た逃ぐる所無し
因て
恭しく慈訓を奉じ　更に法統を継ぐ
今回の造営は
蓋し是れ先師終身の素願にして
即ち当職　一世の大業なり
弟子光道　仏智の光明に従り
右京嵯峨の霊地へ導きを蒙り

いておられた願い（素懐）であって、当職にとっても一世一代の重大な仕事である。弟子光道、仏様の御智慧という光明によって、右京嵯峨の霊地へ導きを蒙って、この地に諸尊の御遷座を請う。愚僧（私）に徳がないにもかかわらず、たちまちにして仏閣ができあがった。恰も仏様が自らお造りになったようだ。まさにこれは、今の時代の奇瑞としか言いようがない。

その上、古都・京都随一の嵯峨の景観に融け込むべく地上部分をこぢんまりと造り、御堂は地下とした。そのため、暗くじめじめして風通しの悪い空間になるものと思われるだろうが、匠が技を駆使してくれたお陰で、全くこれに反し、明るく風通しよく、冬は暖かく夏は涼しく、

斯の地に諸尊の遷座を請ふ
愚僧徳無しと雖も
忽（たちまちにして）仏閣成る
恰（あたか）も仏の自ら造らせ給へるが如し
当（まさ）に是れ当代の奇瑞たるべし
加之（しかのみならず）
古都京師（けいし）随一の景観風致に倣（なら）ひ
地上の屋舎を小さきに造り
堂宇（どう）を地下に設（もう）く
諸人暗湿（しょうじん）なる堂内を懸念すれども
匠人の技を駆使するを以て為すに
孰為明為爽冬暖夏涼（たがいめいいきょうとうだんかりょう）たるを想はんや
亦復且外界喧噪（またまたがいかいけんそう）を遮断す
恰も此の堂安養浄刹の微妙（みょう）を億（おも）はしむ

しかも外界の騒音のない、浄土の空間を思わせるほどの快適な空間に仕上がったのである。

切望するのは、堂宇の災いを防ぎ、永久に、安全を保つであろうことを。

それゆえ、寺のいしずえがしっかりしていて、遠く五十六億七千万年後に弥勒菩薩が世に出でられて説法されるまでに及び、法流の源が深く、遙に全世界に至るであろうことを、敬って申し上げる。

庶幾

堂宇の禍害を防ぎ

永久　安全を保たんことを

然則

仏閣基固うして遠く

龍華三會之暁に及び

法流源深うして

遙に須弥四域之境に至らんことを

敬って日す

得度して二年

大谷　光純

皆様、こんばんは。初めてお目にかかる方も多いのではないかと思います。大谷光純と申します。どうぞよろしくお願い致します。

法讃寺にお邪魔するのは今回が初めてですが、前住職には私が小学生の頃に何度かお会いしたことがあります。昔の記憶ですが、個性的な方だと強く印象に残っています。

こちらの御門徒は非常に熱心でいらっしゃるということをよく聞きます。

講習会の後にはみなさん感想文を出されるとか。そんな御門徒の前でお話するということで大変緊張しております。

今日は私の自己紹介を兼ねまして、「後継者になる決意をした経緯」や「新門という立場になって思うこと」を中心にお話しさせていただきたいと思います。

私は昭和五十七年に生まれました。三人姉妹の末っ子で、九歳と十歳上に二人の姉がおります。小さい頃は、まさか自分が父の後を継ぐことになるなど想像もしませんでした。生まれたときはすでに大谷派との紛争も始まっていましたし、この先どうなるかも分からない状況でした。今の嵯峨の本願寺が出来上がるなんて、ほんの十年前でも誰も想定していなかったことです。

寺の跡継ぎと言いますと、小さい頃に得度を受け、将来は住職になるのだと自覚してその道を歩むことが多いと思いますが、私の場合はそうではあり

ませんでした。大学では経済学を専攻し、その後大学院に進学しました。学生の頃の将来像は、スーツを着てバリバリ仕事をするキャリアウーマン。大学院を卒業した後は、東京で営業の仕事をしていましたので、描いていた将来像に近いものだったと思います。

ちょうどその頃、本願寺では仮御堂と寺務所が完成して、次はいよいよ本堂を建てようという話になっていました。京都へ帰省するとやっぱり家のことが気になり始め、悩んだ末に、京都にある会社へ転職しました。京都で引き続き会社員をしていましたが、この頃には、後を継ぐということをある程度決心していたと思います。平成二十一年三月に得度を受け、新門という立場になりました。今から二年と少し前のことです。

それまでの人生とは全く違う大きな決断をしたなぁと自分でも思います。決断をするにあたって、いろいろなことを考えましたが、一番私の背中を押したのは、父や祖父の姿でした。大谷派との紛争中はとても大変な思いをし

ているはずですが、いつも堂々としていました。味方も多くない中で、どれだけ窮地に立たされても、後ろめたさは一切ありませんでした。私は幼いながらに「きっと正しいことをしているんだろうなぁ」と確信していました。

私は「後を継いでほしい」と言われたことはありません。何となくそんな雰囲気はありましたが、実際に父から言われることはありませんでした。とても自由に育ててもらった上で、「私が後をやろう」と自分で決めたことは、私の大きな原動力になっています。誰にやらされる訳ではなく自分自身で決めたことだからこそ、逃げられないという実感があります。自分で決断する機会を与えてもらったことにとても感謝しています。

新門になってみて強く感じることは、七百年以上もの間、親から子へと脈々と受け継がれるということの尊さです。これまで「世襲」ということに対して良い印象は持っていませんでした。不公平な気がしていました。でも、この立場に立ってみて違う見方をするようになりました。今までやってきた

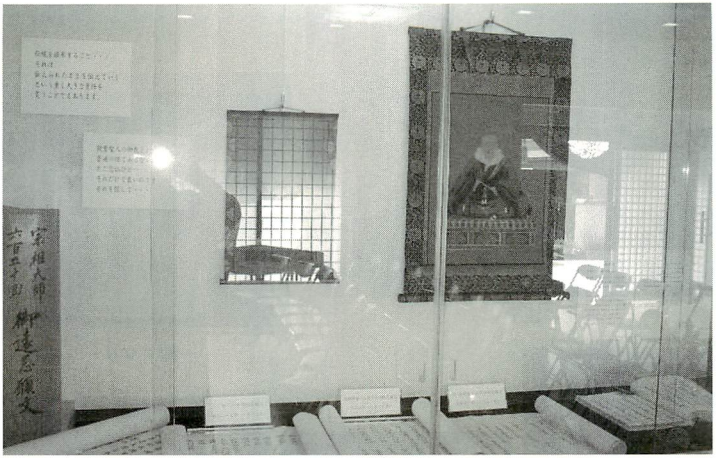
人が、恐れ多いことながら自分の上に連なっている。御歴代の後に私が連なるんだという、その重みを強く感じます。血がつながっているからこそ感じられる親しみと責任があるのだと思います。以前、父にこんなことを聞いたことがあります。「第〇世はどんなことをしはったん（されたの）？」と。第何世かは忘れてしまいましたが、その功績を聞きたくて質問をしました。すると、「目立った功績がある人だけが偉いというわけじゃない。それまで伝わったことを当たり前に次の世代に伝えるだけでもすごいことなんだ」という答えが返ってきました。

先月、落慶・御遠忌の法要がおかげさまで無事に終わりました。法讃寺からもたくさんお参りに来ていただきました。得度して二年でこれだけの大きな法要をむかえるというのは、まだまだ初心者の私にとってハードなものでしたが、貴重な経験をさせていただいたと思います。特に今回は声明に力を

入れようということで、出仕する人を集めて法要前に十日間の特訓がありました。坂東曲を初めて見たときは衝撃的でした。それから、正信偈には実は九つも種類があって、法要の重さによって勤められるものが異なります。単純に言うと、法要が重くなるほどお勤めが長くなり、高音になります。つまり、お勤めをするほうにとっては法要が重いほどより難しい声明になります。

大きな法要を終えて、これからの本願寺をこんな風にしたいという課題も出てきました。それは、本願寺をたくさんの人が集まる場所にしたい、「来てよかった！また次もお参りに来よう！」と思って帰って欲しい、お念仏の声が響きわたるような御堂にしたい、ということです。さんざん声明を練習しても、お参りに来る人が少ないというのはとても寂しいことです。

これからも皆さんのお力を借りながら、もっともっと活気あるところにしていきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



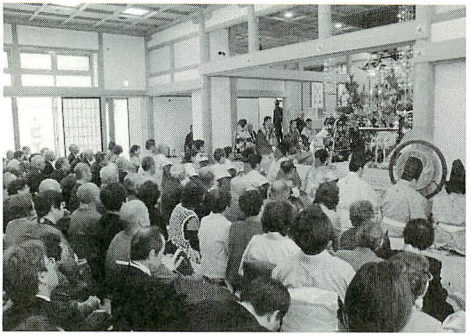
東本願寺の法燈継承を示す顕如上人御自筆の教如上人の法名など宝物を展示

須弥壇（しゅみだん）収骨のお知らせ

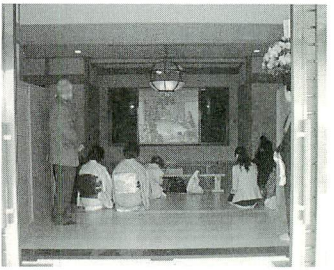
本願寺では、予てより各地御門徒から要望の強かった須弥壇収骨を、本年九月から開始いたします。ご希望の方は、前もって本願寺寺務所まで、お問合せ下さい。

須弥壇収骨は、本堂正面向かって右側の親鸞聖人御真影の真下に分骨をお納めすることです。

本願寺寺務所



満堂の法要



一階スクリーンにも

法要に花をそえたお稚児さん

大谷楽苑の演奏

親しくお話を聞く

あとがき

みめぐみの刊行委員会

前回の『第四十一部』発刊の直後、「東日本大震災」が発生し未曾有の被害をもたらしました。被害に遭われた皆々様に衷心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興を願わずにはいられません。

嵯峨の本願寺では五月中旬、「正しい浄土真宗を顕彰しよう」と、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要と本堂落慶法要が営まれました。待ちに待った本堂の落慶であり、五十年に一度の宗祖聖人への報恩感謝の法要でありました。

今回は法要の特集号で、その様子をお伝えするために写真を多くし、ページも増やしました。光道台下が落慶法要で読み上げられた「表白」を分かり易く解説し、ここに至るまでのお気持ちと大切なこれからについて語って下さっています。

台下は「ご一緒にあらゆる企画を試して参りたい」と仰っています。うつわは出来ました。台下と共に内容をいっそう充実させて参りましょう。

また、今回は光純新門様が山形県で初のご法話をされた時の内容をまとめてお寄せ下さいました。この場をお借りして御礼申し上げます。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』１冊の価格は200円(税込)です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料　1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料　5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの　第42部

2011年７月５日　印刷
2011年７月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会

〒616-8432
京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内
TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220
振替口座　01060－5－56990

印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊